

伝統衣装の既製服化と民族意識に関する文化人類学的研究 —中国雲南省モンを事例に—

宮脇千絵

国立民族学博物館 外来研究員

（現 南山大学人類学研究所 研究員）

緒言

本研究の目的は、中国雲南省の蒙の服飾と民族意識の相互関係を明らかにすることである。

モンは中国少数民族ミャオ族のうち、主に雲南省に居住する自称集団である。ミャオ族は中国少数民族のなかでも、とりわけ衣装の華やかさ、染織技術の精巧さで知られ、居住地域や下位集団ごとに異なる衣装は100種類以上あるとされる。しかし、文山州の蒙の衣装に関する研究蓄積は多くない。またこの地域の蒙の伝統衣装は、1990年代後半以降、既製服化がすすみ、規格化されたスタイルが広範囲に流通することで、これまでのように集団識別の指標として機能し得なくなっている¹⁾。

中国では、明・清代から衣装の違いが集団識別の目安および集団名の由来となってきた²⁾。特にスカートの色をもとにした紅、黒、白、青、花ミャオという呼称は現在まで汎用性を持っている。文山州に居住するモンは、それぞれモン・スー、モン・ジュア、モン・ボア、モン・ドウといった自称を持つが、漢族をはじめとする他者からは上述のような色による他称で呼ばれる。

従来固定的だととらえられてきた伝統衣装は、近年グローバル化との関わりによって、世界各地から時代を通じたスタイルの変遷を明らかにする事例研究の蓄積が進んでいる³⁾。そもそも、中国西南地域から東南アジア大陸部の少数民族や山地民のアイデンティティは、柔軟的であり状況に応じて移り変わるものであるとの指摘は、繰り返されてきた^{4,5)}。服飾が、そのようなアイデンティティ（民族意識）の移り変わりにいかに作用しているのか、あるいはしていないのかを考察する。

方法

研究は中国雲南省文山州における現地調査を主として実施した。これまで長期調査をおこなってきた文山県

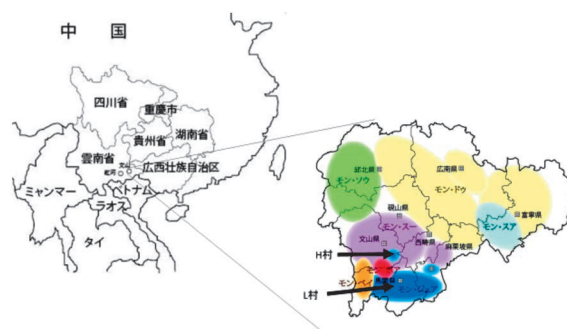


図1 文山州の位置と調査地、および各サブ・グループの分布



写真1

H村に加え、新たに馬関県L村で調査をおこなった（図1）。また、文山県を中心に近年展開しているモン衣装の既製服を販売する商店でも聞き取り、観察をおこなった（写真1）。

結果

1. それぞれの衣装の特徴

文山州に居住する蒙の衣装は、上着、プリーツが特徴のスカート、前掛け、腰帯、脚絆、頭巾から成る。文山県、馬関県に居住するそれぞれの蒙の衣装の特徴は次のとおりである（図2）。

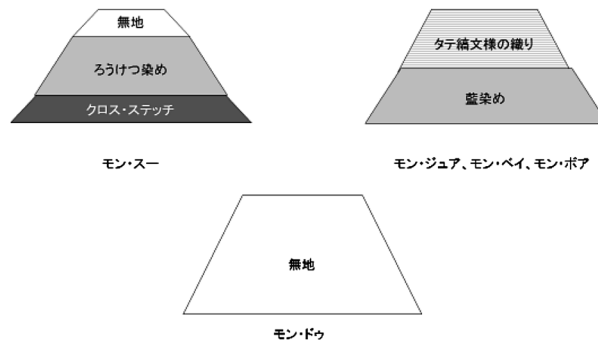


図2 各サブ・グループのスカートの特徴



写真2

モン・スー：スカートは、腰部分（シー・ター）、ろうけつ染めをほどこした中央部分（トー・ター）、クロス・ステッチをほどこした裾部分（タン・ター）の三段構成になっている。脚絆は二等辺三角形のかたちをしており、刺繍で派手に装飾される（写真2）。

モン・ジュア、モン・ボア、モン・ベイ：スカートはアオ・ロー・ポーと呼ばれる上下二段構成になっている（写真3）。2枚の布は、生成りの織布、藍染めをほどこした織布、タテ糸に藍染めをした糸を混ぜた縞文様などがある。クロス・ステッチはほどこさない。この3集団のスカートはほとんど同じ見た目だが、モン・ジュアのスカートには一本の文様があり、モン・ボアのものは文様が細かいという点が異なる。

モン・ドゥ：染めやクロス・ステッチをほどこしていない生成りの無地のスカートが特徴（写真4）。そのスカートの色から「白ミャオ」と称されるが、一部には黒色（藍色）のスカートを穿いているモン・ドゥもいる。脚絆の丈が長い。

2. モン・スー衣装への移行

H村はモン・ジュアの居住村、L村はモン・ボアの村



写真3

である。しかし現在、それぞれのサブ・グループの衣装を着用している者はいない。多くの者は、モン・スーの衣装を選好しているのである（写真5）。

その理由として多くの者が挙げるのは、モン・スーのスカートの穿きやすさである。モン・ジュアやモン・ボアのスカートは二段構成になっているため、プリーツの境目が中央にくる。一方、モン・スーのスカートは腰部分が細くなっており、またその部分はプリーツも細かくなっているため、腰に密着しやすく穿きやすいのだという。

女性たちの通婚範囲が拡大するに従い、婚入してきたモン・スー女性にモン・スーのスカートの作り方を習い、それが村落内に広まっていった経緯もある。

また1990年代以降は、文山県を中心に拡大してきたモン衣装の既製服化の影響が指摘できよう。そこで製作、販売される衣装は、工業製の化繊布を使用しているため、もはやその製作技法、形態やデザインに特定のサブ・グループらしさを見出すことはできない。

3. スカートからズボンへの移行

またより若い世代は、普段着として洋服を着用して



写真4

いる。特にL村は、漢族との混住村なので、洋服への移行が早かったと思われる。蒙ンの衣装を着用するのは、定期市や旧正月の祭りなどハレの日のみだと言うことであった（写真6）。

洋服への移行は、すなわちスカートからズボンへの移行だとも言える。筆者の2008年ごろの調査では、村落内でズボンををはくことは、「恥ずかしい」ことで「はしたない」と感じる女性が多く、上半身はTシャツやセーターを着ても下半身は蒙ンのスカートを着用している人がほとんどであった。しかし今回の調査では、そのような女性たちも洋服のズボンを穿き始めていることが確認できた。ズボンのほうが動きやすく洗濯もしやすい、また暖かいのだという。

また子育て中の若い女性たちからは、子供がいるから蒙ンの衣装は着用しないという意見が出された。より簡便な洋服が入手できるようになり、蒙ンの衣装が日常着として機能しなくなってきているといえる。

4. 国外との往来

L村がある馬関県はベトナムと国境を接しているため、ベトナムのモンとの往来が多いことがわかった。近年ではベトナム側から嫁いでくる女性も多い。

文山県の商店街で唯一、大麻製の衣装を販売している店がある。店主は75歳のモン・ボアの女性である。ベトナムの親戚（おいの妻がベトナム出身）をつてに大麻製の布を仕入れ、それを縫製して大麻製のスカートや男性用チョッキを製作している。客は現地のモンである。ここで販売されているスカート、腰帯はモン・スー、モン・ジュア、モン・ボアのものである。モン・ドゥの衣装を扱っていないことについて、仕入れ元がモン・ドゥの人ではないが、注文があれば別ルートから仕



写真5

入れるとのことであった。モン・ボアの店主にとって、モン・スーの衣装には馴染みがあるが、モン・ドゥの衣装に対しては距離があるようである。

5. 博物館展示を通じた表象

また新たな動向として、博物館展示が挙げられる。2015年1月1日に文山州博物館が開館した。文山州は11の民族を擁しており、展示では各民族の文化、社会が紹介されている。モン展示に関しては、衣装が6種類、展示されていた。このような展示を通して、自文化を客観的にまなざす視点が育成される可能性が指摘できる。

考 察

調査の結果から、蒙ンの人びと自身は、もはや衣装の差異にサブ・グループとしてのアイデンティティを重ねていないことが浮かび上がってきた。結婚によって村落、サブ・グループの境界を移動する女性たちは、「サブ・グループごとに異なる」とされる衣装の差異にはそれほど執着していないと思われる。

どのサブ・グループに嫁いても構わないということは、ある70代の男性の「食べること、着ることは同じ」という言葉に裏付けられる。ただし漢族に嫁ぐことは文



写真6

脈が異なる。現在は漢族との通婚も少なくないが、かつて漢族に嫁ぐ女性は「(服作りの) 技量がない人」だとされていた。どのモンでも衣食住の基本は変わらないが、漢族とは少なくとも衣装の面で異なるとみなされていたことがわかる。

またモン・ドゥは、他のサブ・グループ同士と比べて、衣装の差異の境界線が明確であるように思われる。全く装飾をほどこさない無地のスカートと、セーラーカラーのような襟のある前開きの上衣が特徴で、他のモンの衣装とは製作の技法などが異なる。上述した大麻製の衣装を販売している店でもモン・ドゥのスカートは扱っていない。

以上のように、もともと比較的似ていたモン・ジュア、モン・ベイ、モン・ポアの衣装は、モン・スーの衣装へと移行し、その境界線は曖昧であるのに対し、モン・ドゥだけは異なるとみなされていることが明らかになった。

それではサブ・グループの違いをどこで感じているのかというと、多くの人が「言葉」と回答する。それぞれのサブ・グループの言葉は互いに聞き取れないほどではないが、イントネーション、いくつかの単語、語尾の発音が異なる。彼ら自身もよく言葉の違いを話題にあげ

る。例えば、モン・ベイの父親とモン・ドゥの母親の元に生まれた子供の話す言葉を、他の女性たちが母親のいないところで「モン・ドゥの発音だ」と評している場面に遭遇した。モン・スーとモン・ジュアの両親の子供に対しても、同様のことを言われるとのことであった。

以上のように、服飾と民族意識の結びつきは、一部では曖昧になっていると言える。その背景には、1990年代後半から拡大したモン衣装の既製服化、女性たちの婚出範囲の拡大、洋服の着用などが相互に絡まりあいながら影響してきたことが挙げられよう。特に若者は、自分がモン・何なのかをあまり認識していない場合がある。新年の祭りのために準備する衣装は、サブ・グループの差異のない「ハイブリッドな」既製品が好まれるようになっている(写真6)。以前のように村落に留まらず、進学や出稼ぎ、就業等で広範囲に移動する彼らにとって、モンのサブ・グループとしての自覚は重要ではないのかもしれない。

一方で、今回の調査地域とは居住地域が離れ、衣装の製作法や形態の差異が大きいモン・ドゥに限っては、服飾や言語の境界線が他のサブ・グループ間よりも明確に保たれていることが明らかになった。今後は、モン・ドゥの人びとの服飾と民族意識の関係についても調査していきたい。

謝 辞

本研究を遂行するにあたって、公益財団法人三島海雲記念財団より奨励金を賜りました。奨励金によって、嶺南大学(韓国)で開催されたEast Asian Anthropological Association 2014 Annual Conferenceにて発表をおこない、また約1カ月の現地調査をおこなうことができました。篤くお礼を申し上げます。

文 献

- 1) 宮脇千絵：変化しつづける装い—中国雲南省文山モンの自己と他者をめぐる人類学的服飾研究，総合研究大学院大学提出博士学位論文，2012.
- 2) N. Diamond: Defining the Miao: Ming, Qing, and Contemporary Views (*Cultural Encounters on China's Ethnic Frontiers*, S. Harrell, ed.), University of Washington Press, 1995.
- 3) J. B. Eicher (ed.): *Dress and Ethnicity: Change Across Space and Time*, Berg, 1995.
- 4) リーチ, E. R.: 高地ビルマの政治体系(関本照夫訳), 弘文堂, 1987.
- 5) スコット, ジェームスC.: ゴミア—脱国家の世界史(佐藤仁監訳), みすず書房, 2013.